

# 平成18年度「専修学校教育重点支援プラン」成果報告書

事業名	最上の巨木観光に向けた地域人材の育成とインフラ整備事業		
法人名	学校法人最上広域コア学園		
学校名	新庄コンピュータ専門学校		
代表者	理事長 辻村 一男	担当者 連絡先	事務長 結城 和則 TEL 0233-29-2121

## 1. 事業の概要

本事業は、最上の巨木観光の中心的な担い手たる最上の巨木観光ルート案内人を養成するための教育プログラムの開発・実施を行うとともに、最上の巨木観光ルート案内人の利活用を可能にするためのインフラ整備として、①最上の巨木観光情報の拡充整備、②最上の巨木観光ルートの開発、③最上の巨木観光ルート案内人の認定制度の構築と実施、④最上の巨木観光ルート案内人に関する情報を提供するホームページの開設、⑤インターネットによる最上巨木観光ツアーに関する情報発信のためのシステム構築、⑥最上の巨木観光ルート案内人と地元自治体・観光協会・旅行者・ホテル旅館業者等との連携組織の構築を行う。

本事業によって養成された巨木案内人の実践の場を提供するため、本校は、最上巨木ファンクラブを通して、最上巨木ツアーを企画実施し、アンケート調査を通して地元の観光業界へのインパクトの範囲・程度・性質について検証する。

## 2. 事業の評価に関する項目

### ①目的・重点事項の達成状況

以下、本事業の重点事項の達成状況について報告する。

#### (1)教育プログラム開発の内容について

##### I. 最上の巨木観光ルート案内人養成プログラムの開発

最上の巨木観光ルート案内人養成プログラムは、本校の開発した15の巨木観光ルートに沿った実地研修プログラムと座学研修プログラムについて開発することができた。

これにより実地研修プログラム上、15のルートと多彩な研修が可能となったが、1ルートについて一回だけの実地研修に止まるという結果となった。

この点、受講者の各ルートについての習熟度を深めるということに不都合な面も見られた。

座学研修は、原則として、各巨木ルートに対応するものとし、加えて、最上の巨木案内人に必要とされる関連知識として、地図の見方と山の気象、安全安心ガイドと安全装備、ガイドのマナー、地域の歴史と文化、ガイドの資質に関する学習もあわせて、プログラムの中にも含まれている。座学の内容が広範に過ぎ、必ずしも各巨木ルートに即しているとは言えない内容も若干あった。

##### II. 最上の巨木観光案内人養成実証講座の実施

本年度は、天候に恵まれ、各15回の実地並びに座学研修はスムーズに実施できた。実地研修の際における受講者および講師に対する責任体制を確立し、傷害保険、賠償責任保険の付保の体制も整備され、円滑に本事業を実施できた。

## (2) 最上の巨木インフラ整備について

### I. 最上の巨木観光情報の拡充整備

本校が昨年度整備した56本の巨木情報に加えて、新たに44本の巨木を選定し、「最上の巨木100選」とし、巨木情報のデータを整備・拡充するとともに、最上の巨木マップを完成させた。加えて、この最上の巨木100本のそれぞれにまつわる口承伝説を収集・整理した巨木伝説集を完成し、本校のインターネットにより全国に発信する態勢が整った。

### II. 最上の巨木観光ルートの開発

本事業において本校は、15の一日日帰りの最上巨木観光ルート(および各ルートのタイム・スケジュール)を開発した。巨木の超大性、樹種などに着目し、「最上の全国トップクラスの巨木」、「巨大天然杉の魅力に迫る」、「日本一のカツラ群探訪」、「最上地方のブナ林」、「甌山のクロベ、カツラ、トチノキ探訪」の5ジャンルに整理し、更に各ジャンル毎に2コースを開発した。加えて、案内人養成講座受講者のガイド実践コースとして5つのコースを開発した。この5つのコースは、広大な最上地域(1市4町3村)内の地域性を考慮に入れて原則として、地域内の2つの自治体の区域の一日周遊コースとなっている。

コースの数が豊富で、多様性を持っており、十分な成果と言える。しかしながら、巨木ルートに「食」の要素(山菜料理等の郷土料理)があまり顧慮されていないのではないかという批判がある。実践の場においては、若干のアレンジが必要かもしれない。

### III. 最上巨木自然観光ガイドの認定制度の構築と実施

本校は本事業において、最上巨木自然観光ガイド資格認定委員会を設置し、本案内人養成講座修了時に資格認定委員会を実施し、17名について最上巨木自然観光ガイド一種の資格を認定した。こうした本校のような私的機関によるガイド資格認定は山形県下にあっては初めてのことであり、画期的な出来事である。実証講座の講師の方々及び資格認定委員会の委員の方々の大多数が、地元の自然観光ガイドに関連する分野で経験が長く、住民の信望を集めている人々であるため、最上巨木自然観光ガイド一種の資格が、地域の旅館ホテル業界等において一定の信頼性と権威を得ている。達成率100%と言ってよい。

### IV. 最上自然観光ガイドに関する情報を提供するホームページの開設

本校のホームページ上に、本校の認定した最上巨木自然観光ガイド一種の資格取得者に関する情報(プロフィール、住所、電話番号、ガイドの契約条件等)を本人の同意を得て掲載し、観光業者、巨木ファン、旅館ホテル業者などに対し発信する態勢を確立した。ただ、ホームページ上に開示するガイドの個人情報をもとのレベルまでの情報にするかは、検討中である。

### V. インターネットによる最上巨木観光ツアーに関する情報発信のためのシステム構築

本校の企画する巨木観光ツアーに関する情報をインターネットを通じて全国の巨木ファンに発信するシステム構築は、本事業開始当初より、すでに稼動しており、本校の主催する最上の巨木ファンクラブの会員に対して、巨木情報とともに、巨木ツアーの募集、山行日記等について情報発信を行っている。

### VI. 最上巨木自然観光ガイドと地元自治体・観光協会・旅行者・旅館ホテル業者等との連携組織の構築

本事業において本校は、明確な連携の組織化(仮称「最上巨木自然観光ガイド会」の設立)までには至らなかった。ただ、本校は、最上地域の1市4町3村の自治体の全額出資の公設民営の専門学校であり、常日頃より、地域の県や市町村と連携した活動を行っており、また、地元産業界との意思疎通を必要に応じて行える立場にある。本事業実施にあたっては、本校は、地元自治体や観光業者等と実質的な意見交換や協力を行ってきたと言える。

### VII. 最上巨木ツアーの企画・実施とその地元観光業等に対するインパクトの範囲・程度・性質についての検証

本事業において、本校の主催する最上巨木ツアー参加者、旅行者、旅館ホテル業者、およびタクシー業者を対象としてアンケート調査(必要に応じて、インタビューも)を行った。全体の回収率は、44.9%であり、ここでのアンケート結果には、最上地域という比較的狭い地域社会ということを考え合わせると、相当程度、客観性のあるものと評価してよい。ツアー参加者のガイドに対する要望、旅館ホテル業者の巨木観光にかかる期待、本校の認定した最上巨木自然観光ガイド一種の資格に対する地元産業界の評価、最上地域における自然観光ガイドのガイド料の相場等を知る上で、本アンケート調査は貴重な資料となった。

## ②事業により得られた成果

### (1)「最上の巨木観光ルート案内人養成プログラム」の開発

昨年度の事業(「専修学校と地元自治体・企業(観光業等)との連携による自然観光ガイド養成プログラム開発」)にあっては、最上の自然観光ガイドとしての一般的資質・技能・知識の習得を目的とする「最上自然観光ガイド養成プログラム」を作成・実施したが、本年度においては、最上地域の巨木観光に焦点を絞った「最上自然観光ガイド養成プログラム」を開発するとともに、最上の巨木観光ルートとして15の一日コースを開発した。

最上の巨木観光ルート案内人養成プログラムは完全に実地のコースに即した養成プログラムとなっており、その実地講習プログラムは、この15コースに即応したものとなっており、座学講習プログラムも、5ジャンルのコース(1ジャンル毎2コース、計10コース)に関する巨木およびこれに関する知識・技術の学習を中心とする(各ジャンルに対応して2回の座学講座を設定)。

### (2)「最上の巨木観光ルート」の開発

最上地域は全国有数の巨木の宝庫であり、これまで発見されている代表的な巨木だけでも100本を超える。最上の巨木観光ルート案内人養成プログラムにおいては、巨木の超大性、巨木の樹種等に着目し、①「最上の全国トップクラスの巨木」、②「巨大天然杉の魅力に迫る」、③「日本一のカツラ群探訪」、④「最上地方のブナ林」、⑤「甌山のクロバ、カツラ、トチノキ探訪」の5つのジャンルに整理し、巨木巡り一日コースを開発し、更に各ジャンル毎に2コースを開発した。加えて、養成講座受講者のガイド実践コースとして5つのコースを開発した。この5つの各コースは、広大な最上地域(1市4町3村)内の地域性を考慮を入れて原則として、地域内の2つの自治体の区域の一日周遊コースとなっている。

こうした15の巨木巡り一日コースの開発は、地元の旅館(ホテル)業者、旅行業者等から大きな関心をもって注目されている。本校による旅館(ホテル)業者ならびに旅行業者に対するアンケート調査によれば、回答した業者の半数以上(52.8%)が、巨木コースの開発が集客につながるとしている。

### (3)実証講座「最上の巨木案内人養成講座」の実施

最上地域において一般公募を行い、23名の応募者から最終的に17名の受講者に対し、実証講座「最上の巨木案内人養成講座」を実施した。この受講者の年代構成は、60代7名、50代7名、40代2名、30代1名となっている。すでに本地域で、一線で活動する先輩ガイドの後継者養成という目的をも本実証講座が担っていることは明らかである。講師は、昨年度と同様、最上地域を中心に第一線で活躍されている方々であり、本年度の講座の指導にあたっては、昨年以上の深く、かつより具体的な専門的知識技能を教授していただき、受講者にきわめて好評であった。

### (4)「最上巨木自然観光ガイド」の資格認定試験制度の確立と実施

本事業において本校は、資格認定委員会を組織し、「最上巨木自然観光ガイド認定試験」を構築し、「最上巨木自然観光ガイド一種認定試験」を実施し、17名の資格認定を行った。

資格認定委員会は9名の委員からなり、地元の有力な郷土史家、自然観光ガイド指導者、社会教育指導員、登山家、法律専門家等によって構成されている。出願資格は、本年度の最上の巨木案内人養成講座修了見込みの者で、かつ、20歳以上の者で登山歴2年以上かつ30回以上の登山経験者に限られる。資格認定試験の審査方法は、出願者から事前に提出された2つの課題レポートについて、口頭試問を行うとともに、実技の評点と合わせて評価するものである。

私的機関がこのような自然観光ガイド資格を認定するというのは、山形県下において初めてのことであり、本校としても一抹の不安があったが、地元の自治体、旅館(ホテル)業界、ツアー参加者、タクシー業界などからは、本校によるガイド資格認定について大きな期待がかけられているとあってよい。本校のアンケート調査によれば、回答したツアー参加者のうちの72.7%が最上巨木自然観光ガイド一種の資格を有するガイドを利用したいと考えており、また、回答した旅館(ホテル)業者及び旅行業者の66.7%は、最上巨木自然観光ガイド一種の資格者のプロフィール等が本校のホームページ上への掲載が行われた場合は同ホームページを利用するとしている。最上巨木自然観光ガイド一種の資格がスタートの時点から、これほどの期待と一定の権威をもつことになったのは、案内人養成講座の指導等、本事業に献身的に協力して下さった本地域の各分野の専門家の方々のおかげであると考える。

### (5)最上の巨木観光情報の拡充整備

本事業において本校は、最上の巨木観光のインフラ整備事業の一環として、昨年度整備した56本の巨木情報に加えて、新たに44本を加えて、計100本の巨木情報のデータを整備、拡充するとともに、「最上の巨木100選」を全国に向けて紹介する態勢を整えた。加えて、この100本のそれぞれにまつわる口承伝説を収集して、巨木100本の伝説集を本校のインターネット上に掲載する予定である。

本地域にあっては、本事業を契機として新たな巨木の発見への機運が確実に高まりつつある。本年3月5日に開催された成果発表会で行われた、受講生2名(戸沢村在住)の実践事例発表「戸沢村における巨木の発見と観光資源としての可能性について」が示すように、地域の住民が「おらが村の巨木」の発見を通じて、地域のすばらしさ、巨木の大切さ、自然保護の重要性に目覚めつつある。

#### (6) 本講座受講者の有料ガイド実践へのステップ・アップの機運

本事業実施の最も大きな成果は、昨年度ならびに本年度の実証講座を受講した最上町在住の6名が地元自治体と連携して自然観光ガイドの実践に踏み出したことである。この6名を中心とする最上町東法田山愛好会は、昨年6月から10月にかけて計7回の神室連峰登山ツアーを企画・実施し、150名ほどのツアー参加者を集めた。今年も、計6回の登山ツアーを計画している。

本事業成果発表会(3月5日)における東法田山愛好会リーダー、菅英也氏の発表(「最上町におけるガイドの実践事例」)によれば、登山ツアー中、2件のツアー参加者の事故が発生し、特に初心のツアー参加者に対する安全対策の問題(ツアー客の班別行動の体制の確立と徹底、ツアー客募集段階における登山ツアー計画に関する詳細かつ十分な情報提供の体制の確立等)について今後の課題を残すこととなった。

とはいえ、東法田山愛好会は、ツアー客に対する記念写真および山行日記の配布、会員宅で収穫した新鮮な農産物の提供等のサービスも今後、取り入れていく方針のようである。こうした同愛好会の積極的な動きは、他の実証講座受講者や県等の地元自治体にも大きな衝撃を与えている。

### ③ 今後の活用

#### I. 最上巨木自然観光ガイド

今年度、本校の認定した最上巨木自然観光ガイドの資格取得者は、ガイドとして一本立ちする前段階で、当面、すでに一線で活躍されているガイドの補助者として、本校の主催する最上巨木ツアー等において活用できるし、また活用する必要がある。最上巨木自然観光ガイドが自ら企画・実行するツアーについては、何らかの経験者・専門家によるサポート組織が必要である。

#### II. 最上巨木観光ルート

本事業で開発された最上巨木観光ルートおよび各ルートのタイム・スケジュールは、直接、ガイド実践の場で利用可能である。ただし、「食」の要素と「物語性」を重視する場合は、若干のアレンジが必要である。この15ルートが最上巨木自然観光ガイドのプロフィール等とともに、本校のホームページで紹介されることにより、ツアー客が巨木コースとそのガイドを選択できるような体制を作ることが可能となる。こうしたホームページ上での情報提供サービスは、旅館ホテル業者、旅行業者、観光協会、自治体の観光課等においても当然、利用可能となる。端的に言えば、本年度、開発された最上巨木観光ルートは、最上の観光資源そのものと言ってよい。

#### III. 「最上の巨木100選」とそのマップ、および伝説集に関する最上の巨木情報

「最上の巨木100選」とそのマップ、および巨木の伝説集は本校のインターネットによって発信されることによって、ガイド、ツアー客、巨木ファン、旅行業者、旅館ホテル業者、自治体によって利用可能である。

### ④ 次年度以降における課題・展開

#### (1) 最上の巨木案内人養成講座の受講者について

①昨年度の受講者の平均年齢は55.5歳であったが、今年度は、さらに高齢化し58.2歳となった。しかし、鮭川村から30代の受講者がでてきたとは喜ばしいことである。

②受講者に対するアンケート調査によれば、最上巨木自然観光ガイド一種の資格取得後、この資格を利用してガイド業(有料ガイド)を行いたいとする者は回答者全体の41.2%を占める一方、「本ガイド資格の意義は認めるが、この資格を取得してもガイドを行うつもりはない」とするものも、同率の41.2%を占めた。こうした当面、ガイドをするつもりはないとする受講者たちの中の大多数は、自信がいたら、あるいは定年退職したら、ガイドをやってもいいとする人びとであり、これらの人々のための将来を見すえた定期的研修プログラムも必要のようである。

## (2) 講座の内容について

① 上述のように、最上の巨木ルートについては、5ジャンルに分け、1ジャンル毎に2コースを設定し、加えて、最上地域内部の地域性(1市4町3村)に着目し、5ルート(各ルートは、地域内の二つの自治体の区域内を周遊する)を開発した。かくて、実質的には全15コースの巨木ルートの案内について実証講座において学習したわけであるが、若干の問題点もある。理想的には、特定の1コースについて春夏秋冬における見所、動植物、伝説、更にはまた危険箇所、気象変化、交通手段、安全な休憩場所等についての熟知が必要であろうと思う。将来的には、各コースに対応するマニュアルの作成も必要であると考え。

② 本養成講座は、本校の認定する最上巨木自然観光ガイド一種の資格レベル(インタープリター・レベル)の知識・能力を持つガイドの養成を目的としており、高度な登山技術、ツアーやコースのプランニング能力および事業管理能力を持つ高度なガイドの養成までは目的としていない。したがって、最上巨木自然観光ガイド一種の資格レベルの案内人が中級レベル以上の登山技術を要する山岳登山を企画し、ツアー客を募集してツアーを実施するというのには相当な無理がある。こうした本格的な山岳登山のガイドを行うには、特に高度な事業管理能力が必要とされる。事業管理能力とは、ツアーの主催者をいかなる人、団体にするかについての決定、ツアーの引率体制の確立、救急連絡体制の整備、ツアー客に対する保険の付保、賠償責任保険の付保、初心者のツアー客に対する配慮とサポート体制の整備、リーズナブルな、かつ採算性を考えたガイド料の設定、キャンセル料等に関する約定、自然公園法等の自然環境保護に関する法律および条例に関する知識、ガイドの民事・刑事上の責任に関する知識等、全てのガイド業務全般の円滑な運営に必要な能力をいう。こうした事業管理能力を習得するには、より高度な「最上巨木自然観光ガイド二種」(昨年度の事業報告書中では、「最上自然観光シニアガイド」と表現された)のレベルの知識・技能を養成するための講座の開発実施が不可欠である。

③ 本養成講座の実施委員会および実証講座分科会の委員たちから、「物語性がないと、観光は成立しないと書いてよい、単なる美しい自然だけでは観光資源になりえない」という指摘を受けた。巨木、古道、史跡等についての歴史、口承伝説を洗い出すと同時に、1コースの流れそれ自体が一つの物語性を持つように、コース取りをコーディネートする努力も必要である。また、コースのネーミングにも工夫が必要であった。

④ また、地元タクシー業者、最上川舟下り観光業者などから、次のような助言がなされた。すなわち、「巨木の魅力だけで、一泊、二泊の旅行客を集めるのは苦しい。巨木探訪の旅の中に、最上地域特有の「食」の要素(山菜料理、納豆汁、味噌付けおにぎり、漬物等)を取り入れ、リピーター獲得をはかるべきである」。巨木コースのコース取りを行う際に、一考に値する重要な事柄であると考えられる。その点から見るならば、本事業で開発された15の巨木巡り1日コースのコース取りとタイム・スケジュールは、あまりにも巨木にのみに目を奪われたものとなった観は否めない。

## (3) 本養成講座受講者(最上巨木自然観光ガイド一種取得者)の今後

① 本年度、本校が認定した最上巨木自然観光ガイド一種の資格取得者の実践練習の場の確保が緊急の課題である。同資格取得者がプロとして一本立ちする前に、先輩ガイドの補助役を務めることによって実務経験を積むことは、きわめて重要である。本校の主催する「最上の巨木ツアー」にそうした実践練習の場を求めることが可能ではあるが、より多くの実践練習の場を創出することが必要であろう。

② 最上巨木自然観光ガイド一種の資格取得者が実際に、プロとしてガイド業務を行う場合、定期的な研修とともに、保険、法的問題、動植物学、歴史学等の専門家からなるサポート組織を立ち上げることも必要であると考えられる。少なくとも、各分野の専門家を紹介できる組織がなくてはならない。

## (4) 次年度以降の展望

本事業は、最上の巨木に焦点を絞った自然観光ガイドの養成を行うことを目的としており、種々の課題を抱えているものの、巨木に恵まれた最上地域にふさわしい自然観光ガイド養成事業であり、今後も新たな巨木の発見が期待され、巨木案内人の重要性と活動範囲はますます大きくなっていくものと推察される。本事業の中で本校が行ったアンケート調査中においても、地元の旅館・ホテル業者、観光業者等が、いかに最上の巨木観光に期待をかけているか、その情熱を感じた次第である。

ただ、巨木巡り観光ルートのほとんどは比較的標高の低い平場に限定されており、標高1,000mを超える、いわゆる山岳登山を目的としていない。最上地域で山岳登山の醍醐味を味わいたいツアー客には、山岳登山ツアーの多彩なメニューがあつてしかるべきである。すなわち、最上のグリーンツーリズムは、比較的標高の低い平場における巨木巡り観光と標高の高い山岳登山観光を車の両輪として進んでいかなければならないのである。

最上の自然の中心は、何と言っても、多数の山岳そのものであり、その中核をなすものが神室連峰であると言ってよい。全国に名をはせている山形県の山岳は、月山、鳥海山、吾妻連峰、朝日連峰、飯豊連峰と数多い。神室連峰は、標高1,300m程度ながら、東北地方には珍しい褶曲山地であり、特に東側(最上町側)は急峻な崖となっており、その山容から「みちのくアルプス」という別名をもち、また貴重な多くの高山植物や動物、瀑布などにめぐまれている。加えて、神室連峰は、古くより山岳信仰の対象とされ、最上地域随一の秀峰とされ、数多くの伝説を生んできた。

それにもかかわらず、これまで神室連峰は、朝日連峰や飯豊連峰などと比べても、必ずしも多くのツアー客を集めてきたとは言えない(山形県観光者数調査によれば、神室連峰ツアー客数は、平成12年度の42,100人をピークとして減少の傾向にあるようであり、平成15年に至っては28,000人にまで減少している)。その大きな理由の一つとしては、神室連峰ガイドと言われる人がきわめて少数であり、かつ高齢化している現状が挙げられる。本養成講座実施委員会の一人の委員の話では、数年前、ある旅行業者が神室連峰登山ツアーを企画したが、地元ガイドの人材がないため神室連峰登山ツアー事業から撤退したそうである。

他方、前述したように本講座の受講者の6名(いずれも、最上町在住で、昨年の養成講座も受講している)が地元自治体と連携し、昨年5月から10月にかけて計7回の神室連峰登山ツアーを企画・募集し、県内外の総数150名ほどのツアー参加者を集めてガイド業務を果たしている。この事実は、地域に山岳ガイドさえいれば、神室連峰登山のツアー客を集めることが可能であることを示すものである。

神室連峰登山の開発は、巨木観光と並んで、最上地域のグリーンツーリズムの振興のために必要不可欠であると言ってよいと思う。こうした地域のニーズに対応するためには、最上巨木自然観光ガイド一種よりも高度な山岳登山技術をもつ山岳ガイドの養成が急務となっている。

### 3. 事業の実施に関する項目

#### ①実態調査

##### (1)訪問の目的

- ①巨木観光の先進地を訪問し、最上の巨木観光に向けた地域人材の育成とインフラ整備事業に役立てる。
- ②同時に、訪問先の巨木観光状況を実地調査し、当最上地域の巨木観光開発につながる資料の整備を図る。

##### (2)訪問先

- ①屋久島観光協会(鹿児島県熊毛郡上屋久町小瀬田310-1)
- ②全国巨樹・巨木林の会、巨樹情報センター(東京都西多摩郡奥多摩町日原819)
- ③立山町役場 産業観光課(富山県中新川郡立山町前沢2440)

##### (3)調査方法

ヒアリングによる

##### (4)調査項目

- ①巨木ガイド養成の留意点について
- ②ガイド登録・認定制度について
- ③自然資源の観光開発と保護について
- ④全国巨樹・巨木林データベースについて
- ⑤全国巨樹・巨木林の会について

##### (5)調査結果及び分析の内容

- ①地域の自然観光資源を単一商品として、それぞれに磨きをかけると同時に、総合化した特徴のある観光ルートを創造・開発し、その中に最上の巨木の特異性を持ったものを組み入れていくことを、追い求めていきたいものである。
- ②公共性を持った協議会を組織し、巨木の観光開発と保護を同時平行させて、推進していけるようなしくみをつくるのが大切であろう。
- ③巨木のガイド養成にあっては、巨木の特徴に精通するだけでなく、地域の自然資源や歴史、文化、風土等、網羅的に話ができるよう、努力しなければならないし、ガイドの表現方法についても多様に対応し、個性化していくことが望まれるところである。

## ②アンケート調査

最上巨木ツアーの企画実施とその地元観光業等に対するインパクトの範囲・程度・性質についての検証

### ①目的

最上巨木ツアーの企画・実施、本ガイド養成講座ならびに最上巨木自然観光ガイド一種資格認定制度のもつ地域に対するインパクトの範囲・程度・性質についての検証を行うことにある。

②期間 平成19年1月10日～平成19年1月30日

③対象 A. ツアー参加者(38名 回収数11、回収率28.9%)  
B. ガイド養成講座受講者(23名 回収数17、回収率73.9%)  
C. 旅館・ホテル業者及び旅行業者(84社 回収数36、回収率42.9%)  
D. タクシー業者(2社)

④方法 郵送及びヒアリング

### ⑤結果の概要

1) ツアー参加者のうちの72.7%が最上巨木自然観光ガイド一種の資格を有するガイドを利用したいと考えている。その理由として、「一定の素養と知識があり、安心できる」、「ガイドを通して、最上の人の人情に触れることができる」、「最上に関連する情報をよく知ることができる」の3つを同時に挙げる者が高率を占めた(87.5%)。  
2) ガイド養成講座受講者における最上巨木自然観光ガイド一種の資格取得についての考えに関しては、回答者の態度は二分し、「この資格を利用して、ガイド業(有料ガイド)を行いたい」とする者と「本ガイド資格の意義は認めるが、この資格を取得してもガイドを行うつもりはない」とする者が同率(41.2%)を占めた。  
3) 本校の認定する最上巨木自然観光ガイド一種の資格に関する旅館・ホテル業者の立場からの意見としては、最も多かったのは、「巨木コースの開発と本ガイド資格取得者の存在が集客につながる」という回答(52.8%)で、ついで、「最上の巨木は貴重な観光資源であり、本ガイド資格取得者の存在を念頭に新しい事業展開を行いたい」(33.3%)が続いている。一方、「巨木コースの開発と本ガイド資格取得者の存在は、直接には集客につながらない」とする回答は19.4%であった。  
4) 地元のタクシー業界は、グリーンツーリズムを大きなビジネス・チャンスととらえているようである。3年前から最上地域の有力なタクシー会社2社は、県の主導の下で、「最上エコポリス—巨木の里 乗合定額タクシー」を運行し、東京等からの自然観光ツアー客の取り込みの機会を狙っている。地元のタクシー業界としては、最上の巨木はまだPR不足ではあるが、これから全国的に有名になるだろうし、巨木に加えて、山菜採りや山菜料理等をセットにすれば、ツアーの魅力を増すのではないかと考えている。

## ③カリキュラムの開発

最上の巨木観光ルート案内人養成プログラムは、開発した15の最上の巨木観光ルートに即応して作成されているが、その養成プログラムの概要は、以下のとおりである。

- ①全国トップクラスの巨木探訪 (座学6時間、実地16時間)
- ②巨大天然杉の魅力に迫る (座学6時間、実地16時間)
- ③日本一のカツラ群探訪 (座学6時間、実地16時間)
- ④最上地方のブナ林 (座学6時間、実地16時間)
- ⑤甌山探索 (座学6時間、実地16時間)
- ⑥ガイド実践編【最上町と舟形町の巨木案内】 (実地8時間)
- ⑦ガイド実践編【新庄市と大蔵村の巨木案内】 (実地8時間)
- ⑧ガイド実践編【真室川町と金山町の巨木案内】 (実地8時間)
- ⑨ガイド実践編【鮭川村と戸沢村の巨木案内】 (実地8時間)
- ⑩ガイド応用編

芭蕉が歩いた【尿前の関・山刀伐峠の子持ち杉とブナ林】(実地8時間)

なお、最上の巨木案内人に必要とされる関連知識として、地図の見方と山の気象(3時間)、安全安心ガイドと安全装備(3時間)ガイドのマナー(3時間)、地域の歴史と文化(3時間)、ガイドの資質(3時間)もあわせて、カリキュラムの中に含んである。

#### ④実証講座

「最上の巨木観光ルート案内人養成プログラム」に基づき、実証講座「最上の巨木案内人養成講座」を次のとおり実施した。

##### ①期 間

平成18年9月5日から平成18年12月23日まで(計30回)

##### ②受講生 23名(男19名、女4名)

- ・平均年齢 58.2歳
- ・年齢別 30～39歳 1名 40～49歳 2名  
50～59歳 9名 60歳～ 11名
- ・出身地別 新庄市 9名 最上町 6名 金山町 2名  
舟形町 1名 戸沢村 3名 鮭川村 1名  
その他 1名

##### ③実施形態

- ・座学15回(火・木) 時間:午後6時～9時
- ・実地15回(土・日) 時間:実地訓練場所による。  
早い時で午前6時半集合

##### ④成果

- ・最上地域の観光振興におけるシンボルとしての「最上の巨木」が、人口減少の一途を辿る最上地域における交流人口増加の起爆剤として、大いに期待されており、巨木のガイドを養成することは、本最上地域の観光振興策としても大いに注目を浴びていることが本年度のアンケート調査によって明らかになった。
- ・本養成講座の最上町出身の受講生有志が、自治体との協力関係を築きながら、企画した神室山系山開き等において、150名程度のツアー参加者を得て、ガイドの実践を行った。このことは、本養成講座で学んだ数々のノウハウが活かされた好個の事例であり、本事業における大きな成果である。
- ・本養成講座を契機として、最上地域における新たな巨木の発見の機運が高まり、戸沢村蔵岡の有志等により、新たな巨木数本の所在が確認され、今後も更なる巨木の発見が期待されている。

#### ⑤最上巨木自然観光ガイド認定試験制度の構築と実施

資格認定委員会(2回)を開催し、「最上巨木自然観光ガイド認定試験制度」の構築及び最上巨木自然観光ガイド一種認定試験を実施し、17名の資格認定を行った。

最上巨木自然観光ガイド一種認定試験の概要は、以下の通り。

- ①出願資格 最上の巨木案内人養成講座修了見込の者。  
さらに、20歳以上の者で、登山歴2年以上かつ30回以上の登山経験者。
- ②出願期間 平成19年1月10日(水)～平成19年1月31日(水)
- ③出願手続き 次の書類およびレポートを委員会に提出する。
  - 1)最上巨木自然観光ガイド一種認定試験願書[本校指定用紙]
  - 2)次の6つのテーマより、2つ選択し願書とともに、提出する。
    - 1テーマにつき、800字以上(400字詰め原稿用紙2枚以上)
    - ア.自然観光ガイドの使命について述べなさい。
    - イ.最上の動植物の中で特に興味のあるものについて説明しなさい。
    - ウ.安全にガイド業務を行うための留意点を挙げなさい。
    - エ.ガイド中にツアー客が足を骨折した場合の応急措置と緊急対応について述べなさい。
    - オ.ツアー客を満足させるためのガイドとしての接客接遇について述べなさい。
    - カ.夏山登山を行うに際しての留意事項について説明しなさい。
- ④認定方法
  - 1)レポート審査(2テーマ)
  - 2)提出レポートに基づく口頭試問(2テーマ) 2月18日(日)実施  
実技面についての評価は、実地参加時の実技内容に関する評価を基礎として行った。
- ⑤結果の通知  
2月19日(月)、最上巨木自然観光ガイド認定委員会より本人に通知し、17名の認定を行った。